

2024年度 修士課程 春季 国文学専攻 専門【出題意図】

「中古文学」

[設問一]

①②平安時代に成立した作品に関する基礎的な知識を有しているかを問う。

[設問二]

①平安時代に成立した歌物語である『伊勢物語』について、その文章の特徴を、本文内容に即して説明できるかどうかを問う。和歌を核とした物語構成であることを踏まえ、その本文が、心情部を担う和歌と、最小限に切り詰められた叙述とから成っていることを指摘できるか確認する。

②和歌の現代語訳を通じて、古文単語、文法、和歌の修辞等の基礎知識が身についているかを問う。あわせて、歌中に見られる掛詞について、物語文脈との関係から具体的に指摘できるかを確認する。

[設問三]

平安時代に成立した「作り物語」について、その文学史を適切に叙述できるかを問う。「作り物語」とは何か、どのようにして成立したのか、どのような作品が現れ、どのような影響を以降に及ぼしたかなどを、具体的な作品名や作者等を示しながら説明できるかを確認する。

2024年度 修士課程 春季 国文学専攻 専門【出題意図】

「中世文学」

問一 『宇治拾遺物語』の古本系統の一つ、宮内庁書陵部蔵本(いわゆる御所本)の冒頭に載る、一般に「序」と呼ばれているものの翻刻を、段落に分け、適宜漢字を充てたり、送り仮名を送ったり、濁点や句読点を付したりして、本文を校訂する問題。どこに濁点や句読点を打つか、どのように送り仮名を送るか、どこに漢字を充てるか、どこで段落を分けるかは、本文の内容を理解できていなければならない。また、この古本系のいわゆる「序」は、文中に空白(余白)や欠字があるので、『宇治拾遺』のいわゆる「序」がどのようなものなのかという基礎的な知識も必要である。これはこうした古文の読解力や、基本的な知識を問う問題である。

問二 問一に続く問題。『宇治拾遺』のいわゆる「序」の前半に記されているのは、『宇治大納言物語』のことである。そのことが読み取れるかを問う問題であり、古文の読解力が試されるもの。

問三 問一・二に続く問題。『宇治拾遺』のいわゆる「序」の後半は、『宇治拾遺物語』がどのような作品であるかを説明するものである。このことを読み取って、この作品の名称と、これがどのような作品であると称しているか、また、文学史の知識として、『宇治拾遺』について知るところを問う問題。これも古文の読解力を問うとともに、基本的な文学史の知識をも問う。

問四 「説話とはどのようなものか」と考えるかを問う問題。これは研究者の間でも見解が分かれるものであるため、受験者本人が説話についてどこまで理解しているか(あるいは考えているか)を問うものである。中世は説話の時代と呼ばれるほどに、説話集のみならず、歴史物語、軍記物語、その他諸書に素材として用いられているものであって、説話に対する基本的な知識や理解は、中世文学を研究する上で重要なものである。これはそんな説話の性格・性質を、どこまで理解しているか、どこまで考えているかを問う。

「近現代文学」

問Ⅰ

日中戦争時、従軍作家として陸軍に帯同した火野葦平の戦記文学『麦と兵隊』をとりあげた。引用した部分は、従軍記者の「私」と陸軍が誰もいない中国のある村に入り、家の入口に「嬉しくなるやうな美しい文句を書いた赤い紙が貼りつけてある」のを発見した場面である。「私」は、「赤い紙」が「何か執拗な盛り上る生命の力に満ち溢れて居る」ことに感嘆する一方、農民たちにとって「一家の繁栄と麦の収穫」以外には「何の思想も政治も、国家すらも無意味」で、戦争も「ただ農作物を荒す蝗か、洪水か、早魃と同様に一つの災難に過ぎない」とみなす。出題意図は、「私」が中国の農民に抱く上記の認識を、戦争というコンテクストを踏まえてどれだけ批評的に読めるかを見極めることにある。

日本軍は中国に侵攻し多くの被害をもたらしているわけで、戦争と自然災害を同一視することは自分たちの加害性に無自覚であるというほかない。農民たちを無垢な存在と考えることについても、入口に貼られている「赤い紙」の文句から推測しているだけで、農民たちと実際に接したわけでもない。日本軍が村に迫ってきたために、農民たちがどこかに逃げ去ったことは確実であり、やはり自らの加害性を顧みない傲慢な見解だといえる。

解答として求めているのは、①本欄第一段落で引用した作中の文言に注目すること、②その文言から語り手「私」に潜む無自覚さと傲慢さを見極めることである。

問Ⅱ

問Ⅱでは主に、大学院に進学するうえで知っておくべき常識的なレベルの文学史的知識を確認する問題を出題してきたが、ここでは戦前期と戦後占領期における検閲の違いを説明することを求めた。問題の難易度としては、文学史的知識の確認を求める問題よりもやや高かったと思われる。

解答のポイントは、戦前期と戦後占領期それぞれの検閲について、検閲主体・検閲の方法を説明することである。戦前期は内務省による事前検閲が行われた。編集者側は問題なく出版できるように、検閲に引っかかりそうな箇所を伏字にして対応していた。戦後占領期は、GHQ/SCAPが検閲の主体であった。GHQ/SCAPは伏字を一切認めず、検閲に引っかかる箇所を削除し、その前後をつないで出版させた。戦前期には、伏字という記号によってそこに検閲のいう名の暴力が介在していたことが示されるが、戦後占領期の検閲では、作品のどこにも検閲の痕跡を見つけることはできない。

以上のような内容を解答することが求められる。なお、検閲の対象となる表現（例えば、戦後占領期の検閲であれば「占領軍に対する批判、戦争賛美、占領軍兵士と日本女性の関係など」）については、もちろん説明するに越したことはないが、必要条件ではない。

2024年度 修士課程 春季 国文学専攻 専門【出題意図】

「現代文化」

設問1 解答例：「文化」という語については、その内容の多様性や、内包する論理の矛盾が、まず著者によって指摘されている。ただし当該抜粋では、それ以前の二つの問題に重点が置かれている。

第1に、文化という日本語の使用範囲がきわめて広大になった半面、「文化とは何か」をあらためて問題にする態度がとられなくなったことがある。第2に、「文化とは何か」という問いへの答えが、否定形でしか語りようのないものであることも挙げられる。これはすなわち、自然科学・社会科学が対象としない領域に「文化」の問題を位置づける傾向のことである。そうした態度はカルチュラル・スタディーズによって問題化されるに至ったものの、依然として、理解できないことを「文化」として学問のなかで周縁化する慣習は維持されている。

設問2 出題意図：現代文化の研究は、日本文学専攻であっても国際的な視野に立つことが重要である。とくに日本で創作された様々な現代的表現が、グローバル文化(産業)状況の中でどのような状況に置かれているかを知っていることは、大学院進学後の研究活動をスムーズにスタートさせるうえで必要である。そのため、設問2を出題した。